

## はじめに

人間は記号を用いて他者とコミュニケーションを行うことで、今、眼前にいる他者が何を知り、何に注意を向け、何をなそうとしているのかを自らに写し取る。また言語には、過去にその社会に生きた人々がどのように世界を眺め語ったかがパッケージされているため、人間は言語を用いることで、眼前にいない時空を超えた他者の知識や注意をも自らに写し取ることができる。記号と言語、現在と過去における他者の視点を縦糸と横糸として、人間は両者が統合された複雑な世界への意味づけの仕方、すなわち意味の体系を紡いでいく。本書では、子どもがどのようにしてこのような意味の体系を構築していくのか、その過程を探ることを目的とする。

本書の特色は、第一に、言語習得の過程をコミュニケーション一般の発達の中で相対化して捉えることである。人間のコミュニケーションには、言語の他にも顔真似や声真似、指さし、ジェスチャーなど、何かを指し示そうとする様々な記号が現れる。言語の意味の問題を論じるためには、人間が用いるあらゆる記号の体系の中で、言語の役割がなんであるかを相対化して捉える必要があるだろう。また、人間のコミュニケーションの成立には話者交替や注意喚起など、特定の対象を表象しないような信号的要素が重要な役割を果たしている。このような信号的要素と記号的要素はどのように住み分けを行っているのか、やはり両者を相対化しながら捉える必要があるだろう。本書では、人間がコミュニケーションに用いる多層的な道具立ての中で、言語はどのような特殊な立ち位置にあるのか、そして発達の過程でどのようにその特殊な立ち位置を得ていくのかという視点から言語習得を眺める。特にこの点については本書の前半

にて、子どもが対人・対物を含む様々な環境から信号的な情報や記号的な意味を見出す過程、さらにそれを基盤として記号を言語的なやり方で意味づけするようになる過程を議論する。

本書の第二の特色は、他者とのやりとりを通して達成される文化学習としての言語習得を捉えることを目指す点である。子どもは当該社会で暮らしていく中で、社会において必要な、様々な生活習慣を身につける。このような習慣は食事の仕方、排せつの仕方など非常に多岐にわたるが、記号や言語を用いたコミュニケーションもその一部として考えることができる。生活習慣としての言語習得を考える場合、子どもが当該言語社会における他者と世界の対象について意味づけし合うことは重要である。なぜならば、他者の意図や注意がどこにあるのかを推論することがコミュニケーションのその都度における記号の意味を方向付け、またそのような記号によってつながれた他者の集団の存在、すなわち社会の存在を理解することが、イマ・ココを越えて共有が期待される言語の意味を生み出すからである。このような過程を議論するためには、第一に人間が種として共有しているような社会性はどのようなものか、第二に私たちを取り巻く社会がどのような信号・記号コミュニケーションの連続によって成り立っているかという2つの視点を組み合わせて考える必要があるだろう。本書の後半では、当該社会において引き継がれてきた言語の意味体系を、社会の新参者である子どもがどのように発見し構築していくのかについて論じる。

本書は上記2つの一般化を目指すために、できる限り子どもの言語や認知発達の過程だけではなく、言語運用の熟達者である大人にとっての言語の意味や、信号・記号コミュニケーションの性質も合わせて論じる。認知科学を中心に発達心理学、言語学、コミュニケーション論へと越境し言語習得を捉え直すことで、言語習得の新しい視点を提供することを目指す。